

デカルト『知能指導の諸規則』における枚举

—「第七規則」の統一的解釈の試み—

筒井 一穂

はじめに

『知能指導の諸規則』（以下『規則』）の「第七規則」においてデカルトは、「学知を完成するための(ad scientiae complementum)」(AT X, 387, 10; C. fo. 6^r, 174)方法として、「枚举(enumratio)」の操作を導入する。枚举は、一般的に、ある共通の特徴を有する個別的な事例を数え上げる操作とされ、帰納的推論の手段として位置付けられる¹。近世において、ベーコンが単純枚举による帰納法を批判し、自らの排除的帰納法を提示するに至ったことは周知の通りである²。ところで、こうした哲学史的情况を踏まえつつ、デカルトが枚举を自身の方法の中心に据えたことの意義を明らかにするためには、なによりもまず、「第七規則」において枚举とはいかなる操作であるかを見定める必要がある。これはデカルト研究の古典的な主題のひとつだが、今日なお、研究者の間では多かれ少なかれ見解の相違が認められる(本稿3節、および注14を参照)。デカルト的枚举の解釈を困難にしている要因の第一は、『規則』以外のテキストにおいては、枚举への言及こそしばしばあるものの³、それが主題的に論じられる箇所はほとんどなく、結果として、手がかりとなる並行記事が不足していることである。第二の要因は、直観と演繹とのみに依拠して学的探究をなすという『規則』全体の構想において、一般的には演繹と対置される帰納いうならば枚举がいかなる位置を持ちうるのかが定かではないことである(本稿2節を参照)。そして第三の要因は、枚举を解釈するうえでほとんど唯一の足場となる「第七規則」のテキストが、きわめて複層的で難解な記述であるために、枚举についての統一的な理解が共有されにくいことである(本稿1節を参照)。

本稿は、とりわけ第三の困難、すなわち「第七規則」のテキストの難解さを解きほぐすこと、言い換えるなら、「第七規則」の枚举論を統一的に解釈することを眼目とする。そして、この最も基礎的な点において解釈を定めることによって、『規則』の体系における枚举の役割を明確にし、デカルト哲学全体に通底する問題

群における枚挙の位置を画定することまでが、本稿の射程に含まれる。こうした作業を通じて、デカルト的枚挙の哲学的独自性を考察するための地盤を提供することが、本稿の狙いである。

1. 「第七規則」の構造——ケンブリッジ写本からの知見

「第七規則」は、真理の探求において学知を完成させる方法を次のように述べている。「学知を完成させるには、探求されている事物に属するすべてのものをひとつひとつ、十分かつ順序づけられた枚挙によって調べつくすことである」(ATX, 387, 10–13; C. fo. 6^r)。枚挙を通じて学知を完成することが構想されていることは明らかだが、枚挙が実際のところどのような操作であるかを理解するためには、「第七規則」の注釈文を解説しなければならない⁴。しかし既述の通り、この注釈文は構造的に入り組んでいるため、これを整理するところから始めよう。

まず、読解作業上の便宜のために、AT版「第七規則」注釈文の十の段落を⁵、その内容の観点から六つのまとまりに分節してみよう⁶。[VII₁] 第一・第二段落は、過去になされた推論を枚挙によって反復するケースを扱う(ATX, 387, 14–388, 17)。[VII₂] 第三・第四段落は、学知の完成のための枚挙の意義を論じる(ATX, 388, 18–389, 7)。[VII₃] 第五・第六段落は枚挙の十分性について(ATX, 389, 8–390, 5)、[VII₄] 第七段落はその十全性と判明性について(ATX, 390, 6–390, 24)、[VII₅] 第八・第九段落はその順序についてそれぞれ説明を加える(ATX, 390, 25–391, 28)。[VII₆] 第十段落で次節以降の課題が提示され、注釈文は閉じられる(ATX, 392, 1–8)。これらの部分のほとんどは、相互にどのような関係にあるのか——理由・帰結の関係なのか、説明・被説明の関係なのか、それとも同格的な付加や逆接の関係なのか——を示す接続表現を欠いているため、枚挙の働きの説明としてこれら六つの部分のいずれを主部とみなし、いずれを補足的なものとみなすか、という基礎的な点において、確定的な読み方は示されてこなかったと思われる。

けれども、今日のわれわれは、テキストの基礎的な理解に関して、新たな資源を有している。これまでの先行研究にアクセスできた『規則』のテキストは、最も標準的に参照されてきた『遺稿集』(1701)所収の通称アムステルダム版(以下、Aと略記する)に加えて、オランダ語版『デカルト書簡集』(1684)第三巻に所収のフレーゼマーカー訳(N)、ライプニッツ所有の通称ハノーファー写本(H)、そしてバイエヤニコルらによる部分的な引用などである(cf. SE, 4–11)⁷。しかし、ケンブリッジ写本(C)と呼ばれる2011年に新たな写本がケンブリッジ大学で発見され、

これがサージャンソンとエドワーズによる校訂のもと今般出版された(SE)⁸。C写本に関する文献学的考察は未だ進行中であり、先行研究としては、校訂者による序論と、この校訂版についての短い書評のみである(Agostini *et al.* 2023)。本稿では、C写本の文献学的ないし校訂的問題に関しては、このふたつの研究に則り、C写本は『規則』の初期段階での原稿の写しである——つまり、C写本のもととなった原稿にデカルト自身が加筆を施すことで、H写本、A版、N版が参照したはずの原稿が成立した——とみなし(SE, 16)、C写本の原稿の執筆時期は1628-9年ごろと推定する⁹。なお本稿は、以上の校訂的推定を決定的な見解とみなすわけではないが、便宜上、C写本に含まれない部分を指して「加筆部」と呼称する。

さて、C写本の「第七規則」注釈文は、前述のVII_{3,5,6}に対応する部分のみからなる。例の推定を踏まえるなら、VII_{3,5,6}の部分がまず執筆され、その後これにVII_{1,2,4}の部分が加筆された、と考えられる。加えてわれわれは、少なくとも「第七規則」に関するかぎり、C写本に含まれるVII_{3,5,6}を「第七規則」注釈文の主幹的部分とみなし、その他の部分VII_{1,2,4}を、これに対する補足や敷衍のたぐいとみなす方針をとる。というのも、第一に、先に書かれた部分が注釈文の主旨であると考えるのは一般に自然なことだからであり、第二に、この方針によって注釈文全体の構造が明快になるからである。実際、「第八規則」以降の予告にすぎないVII₆を度外視するなら、VII₃前半には枚挙が求められる状況についての注釈が(AT X, 389, 8-25; C. fo. 7^v)、VII₃後半には規則本文で言及された枚挙の「十分」性への注釈が(AT X, 389, 26-390, 5; C. fos. 7^v-8^r)、VII₅には「順序」への注釈が、それぞれ含まれている。さらに、C写本に含まれていない箇所の位置付けに関しては、包括的な検討を踏まなければ断定はできないところではあるが、それぞれが扱うトピックに着目して見通しを述べるなら、VII₁はVII₃後半に属する事柄を、VII₂はVII₃前半に属する事柄を、VII₄はVII₅に属する事柄を、それぞれ敷衍ないし補足するものと読まれうる。このように、C写本を主軸として読むという方針によって、「第七規則」の構造をある程度単純化して解釈を進めることが可能になるのである。

2. 枚挙操作の概要——十分性と順序

本節では、「第七規則」の主幹的部分(VII₃前半、VII₃後半、VII₅)に即して、枚挙における十分性と順序とがいかなる要件であるかを示すことによって、枚挙の操作の概要を把握することを目指す。

VII₃前半では、真理の探究におけるいかなる局面で枚挙が要求されるのかが説明

される。その局面とは、「数多く結合されたものどもからひとつの真理を推理する (infero) 場合」(AT X, 389, 17–18; C. fo. 7^v)である。要するに、多くの前提から結論を導く推理に、枚举が要求されるということである。VII₃前半によれば、そもそも推理一般は、直観か枚举かのいずれかを手段としてなされるのだが、これらは、問題となる推理がどの程度複雑であるかに応じて使い分けられる。というのも、ごく少数の前提だけが求められる単純な推理においては、直観によってその前提と結論とを同時に認識することがわれわれにはできるのだが、それに対して、前提が多数求められる複雑な推理の場合には、「しばしばわれわれの知性には、それらすべてをひとつの直観のもとに完成させるだけの受容力がない」(AT X, 389, 18–19; C. fo. 7^v)のために、いっさいの諸前提そのものを直観することは諦めて、諸前提相互の「結び目 (connexio)」(AT X, 389, 23–24; C. fo. 7^v)を観ることに注力しなければならないからである¹⁰。結び目を観るとはいかなる操作か、という点は次節で検討するが、ひとまず、この操作によって、ある推理をなすために費やされるわれわれの知性の「仕事(negotio)」(AT X, 391, 10; C. fo. 8^r)が節約され、そのぶんこの推理の全体を受容するだけの余力が生まれる、という基本的な点を押さえておこう。つまり、VII₃で念頭に置かれる枚举とは、推理の手続きを効率化し、複雑な推理を可能にする手段である。

ところで、枚举がこうした効率化の操作であるとするなら、その遂行のためにはふたつの条件が求められる。第一は効率化の成功条件であり、VII₃後半によれば、「欠損」を回避することである(AT X, 389, 27; C. fo. 7^v)。ある推理において余分な労力を省略するさい、しばしばわれわれは、推論において不可欠である前提を省略してしまうことがあり、このような手違いが欠損と呼ばれる。当然ながら、枚举による推理の効率化はあくまでも過剰な仕事を省略するものにとどまるのだから、欠損のない「十分な」(AT X, 389, 26; C. fo. 7^v)手続きが求められるのである。

VII₅に記された第二の条件は、効率化の手続きそのものを規定するものであり、いわく、枚举は「順序づけられていなければならない」(AT X, 390, 25; C. fo. 8^r)。というのも、順序のない数え上げ、つまり目につくものを出鱈目に数え尽くすという稚拙な数え上げによって枚举をなそうとするなら、第一に数えるべき対象の多さのゆえに、第二に同じものを重複して数えてしまう手戻りが頻繁に生じるゆえに、枚举をやり切ることはほとんど不可能だからである(cf. AT X, 391, 2–4; C. fo. 8^r)。そこで、推理に必要なもろもろの前提を、その特性に応じていくつかの「クラス」(AT X, 391, 5; C. fo. 8^r)に分類し、このクラスをもとに考察の順序を設定することで、推理に必要な知的コストを大幅に削減することができる。デカルトは与えられた

文字を並べ替えて有意味な単語を生成するアナグラムの例を挙げているが、その要点は、それぞれの文字を数え上げつつ、それらを例えば母音のクラスと子音のクラスに分けることで、無意味な組み合わせを排除できる、ということにある(AT X, 391, 12–28; C. fo. 8^{r-v})¹¹。この例からわかるように、枚挙について言われる順序とは、まずは考察対象を特定のクラスに振り分けることであり、次に、それらのクラスを考察する順番を適切に決定すること、この両方を指している。順序に従い枚挙を行うことで、われわれは、ある程度複雑な推理についても前提を十分な仕方
 方で数えることができるのである。

以上が、C写本の「第七規則」において述べられた枚挙の操作の概要である。ここで、次節以降の考察に混乱を残さないために、枚挙が『規則』的方法において有する位置付け——とりわけ、枚挙と「演繹(deductio)」の関係——を整理しておく必要がある。まずは直観と演繹との関係を確認しておこう¹²。デカルトは、C写本「第三規則」で、「明証的に直観すること、あるいは確実な仕方
 で演繹すること」(SE, 158; cf. AT X, 368, 11–12)が「学知へのもっとも確実な道」であり、「これよりも多くの道は、知能の側からは認めてはならないのであって、それどころか、ほかのすべての道は、疑惑と過誤へと導くものとして棄却されるべきである」(AT X, 370, 16–19; C. fo. 4^v)と述べている。つまりそこでは、「容易かつ判然たる概念作用」と定義された直観に、「別のものからあるものへの純粋な推論(illatio)」と定義された「演繹(deductio)」が対照される(AT X, 368, 10–17; C. fo. 4^v)。加筆部では、この対照について説明が補われており、演繹が対象を「連続的」に、すなわち「思惟の運動」を伴って看取するという点で直観から区別される(AT X, 369, 24–25; 370, 4–9)¹³。これを踏まえて、推論の第一原理およびそれに近接する結論が直観によって、第一原理から離れてある結論が演繹によって、それぞれ認識されると述べられる(AT X, 370, 9–15)。ここで、「第三規則」における演繹という語がふたつの異なる意味で使用されていることに注意しよう。すなわち、一方では、あるものから別のものを導出する活動一般が、他方では、その活動を行う手段が、ともに演繹と呼ばれているのである。導出する活動一般としての演繹は、それが容易なものである場合には直観を手段とし、直観することが困難である場合には演繹を手段とする(cf. AT X, 408, 3–5; C. fos. 13^v–14^r)。

ところで、「第七規則」において「枚挙いうならば帰納」は、直観に並んで真理を結論することのできる唯一の操作である(AT X, 389, 9–11; C. fo. 8^r)。つまりそこでは、「第三規則」で演繹と呼ばれていたものが、枚挙と言い換えられているのである。たしかに、「第三規則」と「第七規則」との説明が多くの点で重複す

ること、とりわけ、直観の射程外にある諸前提を組み合わせて結論を導き出すという本質的な特徴が共通することに鑑みるなら、演繹は枚举と同一の操作であると考えることができる(cf. BA, 110)。ただし、枚举と言い換えられうるのはもっぱら手段としての演繹であり、活動としての演繹ではないという点には留意しておく。活動一般としての演繹は、それがごく単純である場合には、枚举によってではなく直観によってなされるからである。こうして、C写本の「第七規則」を基に理解された枚举を、「第三規則」を補助線として、諸概念の『規則』的布置に置き直すならば、それは手段としての演繹の別称であると解することができる(AT X, 408, 5; C. fo. 14^r)。

3. 枚举の統一性、あるいは生産性

枚举は、それが十分かつ順序づけられているとき、複雑であるゆえに直観を手段とすることのできない(活動一般としての)演繹を遂行する手段である。C写本の記述に基づくなら、この解釈に目立った問題はないように思われる。しかし、従来の解釈では、枚举は必ずしも演繹の手段としてのみ解されてきたわけではなく、むしろ演繹の反復をなすにすぎない非生産的な操作——あるいは少なくとも、非生産的な側面を有する操作——とみなされることもしばしばである¹⁴。実際、加筆部、とりわけ VII₁は、こうした解釈を惹起しやすい記述を含む。本稿は加筆部の記述の優先度を相対的に低く見積もるものではあるが、これを無視するものではないため、こうした解釈がわれわれの前節での枚举理解と整合することを示さなくてはならない。

加筆部 VII₁においてデカルトは、枚举が求められる状況の実例を以下のように提示する。すなわち、「量 A は量 B よりも大きい」という演繹(D_i)、「量 B は量 C よりも大きい」という演繹(D_{ii})、「量 C は量 D よりも大きい」という演繹(D_{iii})があるとき、これらを組み合わせ、「量 A は量 D よりも大きい」という演繹(D_i)を形成する、という状況である(AT X, 387, 22–388, 2)。要するに、D_{ii-iii}を前提として、結論 D_iを導出するという状況であるが、このとき、D_iが直観の射程を出ていると仮定すると、これを遂行する手段は枚举しかない。ところで、D_iが直観の射程に収まらない以上、その確実性は「記憶に依存する」(AT X, 370, 8–9)。つまり、D_{ii-iii}の内容を記憶に保存し、この記憶を想起しつつ D_iを導く必要がある。枚举はこの記憶を「補助」(AT X, 388, 7–8)する手段として提示され、その具体的な仕事は、「はじめのもののから最後のものまで、もはや想像力にいかなる仕事をも残さ

ずに事柄の全部を同時に直観するかのように思われるほどに、いつそう素早く移っていくこと」(ATX, 388, 5–7)である¹⁵。要するに、枚挙は、 D_{i-iii} をあたかも直観するかのように通覧することによって、記憶の脆弱さを補い、 D_i の確実性を保証することができる。

この一連の議論における枚挙の役割を、一部の先行研究は、反復による記憶の補助として解釈する¹⁶。例えば、ある時には D_i を遂行するのに10分を要したひとも、反復練習によってこれを1分で遂行することができるようになるかもしれない。その場合、記憶はこの1分間だけ正しく働いていれば良いのであり、いかにわれわれの記憶能力が生来脆弱であるにせよ、10分間の推論の履歴を記憶する場合に比べれば、はるかに確実な情報を提供することができるだろう。こうして、枚挙は、すでになされた演繹(D_i)を反復することによって記憶を補助し、演繹の確実性を増大する役割を担う、と解釈される。

たしかにデカルトは、「第十一規則」において、 VII_1 の枚挙を取りあげつつ、反復によって「われわれの認識がはるかにいつそう確実なものとなり、また精神の能力も最大限向上する」と述べている(ATX, 407, 6–7; C. fo. 13^v; cf. ATX, 408, 18–409, 7; C. fo. 14^r)。枚挙による反復を通じて、精神の遅鈍は改善され(ATX, 409, 8–9; C. fo. 14^r)、また事柄の順序について反省する習慣が身に付くからである(ATX, 410, 12; C. fo. 14^v)。しかし同時に注意すべきだが、「第十一規則」は、あくまでも枚挙を実践することの「効用(utilitas)」(ATX, 408, 18; C. fo. 14^r)を論じる場であり、そのために記憶や反復に関する側面が強調されているのであって、枚挙の本性に関してこれらが言及されているわけではない。実際、記憶の補助が枚挙の実質として解釈される場合には、 VII_3 と VII_5 で提示された、演繹の手段としての枚挙とのあいだに齟齬をきたす。というのも、後者は未知の結論を導出するという点できわめて生産的であるのに対して、前者は、既知の演繹をただ反復するにすぎず、新たな知をもたらさないという点で、非生産的だからである。この齟齬が調停不可能とみなされる場合には、枚挙に関するデカルトの記述には曖昧さが指摘され(Hubert 1915, 515; Sirven 1928, 384; Weber 1964, 55–57)、何らかの仕方で調停可能とみなされる場合でも、枚挙には異なるふたつの使い方があると解されることになる(Beck 1952, 145; Rodis-Lewis 2013, 180; Verbeek 2021, 50–52)。

とまれわれわれは、枚挙のふたつの用法の整合性を云為するのではなく、その手前で、 VII_1 の議論についての上述の解釈がそもそも妥当かどうかを検討しよう。 VII_1 における枚挙を非生産的とみなす解釈は、次のふたつの主張を含意する。第一に、枚挙に先立ち演繹が成立しているという主張であり、第二に、枚挙は演繹の

諸前提を駆け足で追認する操作にすぎないという主張である。以下ではこれを順に検討していくことにしよう。

第一の主張は、枚举よりもむしろ演繹の解釈として問題を抱えている。演繹は、「第三規則」加筆部において「確実なしかたで認識されたある別の事柄から必然的に結論されるすべてのもの」(AT X, 369, 20–22)と定義されている通り、前提から結論を必然的に導出する操作であり、この必然性によって結論は「確実な仕方」(AT X, 369, 23)知られる。ところで、直観の射程外にある演繹を確実な仕方でする操作が枚举に他ならないとすれば、枚举以前には、ただ不確実な推論があるのみであって、この推論を演繹と呼ぶことは、その定義上不可能である。

ここで注意深く検討すべきは、枚举はすでになされた推論の単なる反復にすぎないとする第二の主張のほうだろう。このように解される場合、枚举は、演繹の手段になりえないことはもちろん、記憶の補助手段としてすらも、限定的な役割しか担うことができない(cf. Verbeek, 2021, 50)。実際、過去になされた推論の連鎖を反復することで、なるほどわれわれはその推論を迅速に辿ることができるようになるだろうし、かくてある程度はわれわれの直観の射程は拡張されるだろうが、その拡張は特筆に値するほどではないと思われる。むしろ、現に学的探究において要求される複雑な推論のほとんどは、このような拡張によってもなお直観の射程を外れるだろう。反復による演繹の速度向上に頼る手段が直観以外にないとなれば、デカルト的方法によって達成できる探究はきわめて初歩的なものとどまる¹⁷。

したがって、枚举が演繹の連鎖の迅速な通覧を可能にするという VII₁ の議論は、反復による能力向上とは別の仕方では解釈されなければならない。ここで、われわれが 1 節において保留しておいた論点、すなわち、枚举が演繹の連鎖の結び目の直観であるという論点を、あらためて展開するのが適切である。これに関して、VII₃ でデカルトは、枚举による演繹の確実性をひと繋ぎの鎖に喩える。

すなわち、ある長い鎖のすべての環を目視で一度に直観して区別することはわれわれにはできないが、それでもなお、もし隣り合う結び目のひとつひとつをわれわれがもし見るとすれば、そのことは、どのような仕方でも最後の環が最初の環と結びついているのかを観察したとわれわれが言うためには、十分なのである。(AT X, 389, 21–25; C. fo. 7^v)

これと同様の文言は「第三規則」加筆部にもあるが(AT X, 369, 26–370, 4)、いず

れにしても肝要なことは、枚挙においては、連鎖する環ではなくて、環の結び目が直観される、という点である。環に喩えられているのは、先ほどわれわれが演繹 D_{I-III} と呼んだものであるが、あらためて具体的に例示してみよう。ある不等式 $(\sqrt{79} > 2.9^2)$ と別の不等式 $(2.9^2 > 1/7)$ を組み合わせて、不等式 $(\sqrt{79} > 1/7)$ を得るとき、すべての項を実際に計算しなければならないとすれば、われわれの知性にはそれなりの負荷がかかる。組み合わせるべき不等式があと三つか四つでも増えれば、それがわれわれの直観の射程を超えることは想像に難くない。しかし、最後の不等式を得るためには、 2.9^2 を実際に計算する必要はなく、むしろそれがふたつの不等式に共通していると気づきさえすれば良い。だから、デカルトが実際にそう表記しているように、これらの不等式の各項をアルファベットの記号に代表させるやり方が好まれる。そうすれば、 $A > B$ 、 $B > C$ といった簡単な記法でこれらの不等式の結びつき——この場合は、ふたつの不等式に共通する項のこと——を看取することができる。これはごく簡略化された例ではあるが、要点は、この手の結論を導きだすためには、中間にある項の値(環)を直観する必要はなく、ただその共通性(結び目)を直観すれば事足りる、ということである。このように具体的な内容を捨象して、各演繹における共通性のみを抜き出すという操作こそが、鎖の環と結び目の比喻で言われていることである。

このような解釈に基づくなら、枚挙によって記憶が補助される所以も十分に理解できる。というのも、この操作によって諸々の演繹をなす各項の内容が捨象されることによって、記憶すべき事柄が実際に、それも大幅に減っているからである。しかし、記憶の補助と反復の迅速化とは、あくまでも枚挙によって各項の内容が捨象されたことの結果にすぎない。枚挙の実質は、あくまでも、各項の内容を捨象しこれを適切な記号に置き換えるという、その操作にこそある¹⁸。こうした操作は、具体的な数値を記号のもとに分類し、その記号を適切な順番で通覧することによって結論を導くものであるかぎり、アナグラムを形成するためにアルファベットを一定のクラスに分類する場合の枚挙と同様、順序と十分性を条件とする枚挙の一例に他ならない。

以上の二点に基づき、われわれは、「第七規則」における枚挙が、一貫して生産的な活動であると考え。というのも、VII₁における枚挙は、第一に、新たな演繹を構成する手段に他ならないからであり、第二に、演繹の構成にあたって、もろもろの前提を順序のもとに配置するという固有の任を負っているからである。かくして、「第七規則」における枚挙の記述に曖昧さを認める理由はもはやないのである。

結論と課題

以上われわれは、C写本の記述を踏まえ、「第七規則」における枚挙についての統一的な理解を得た。すなわち、枚挙とは、与えられた事柄を、順序のもとで十分に数え尽くすことによって、直観によってはなしえない演繹を遂行するための手段である。先行研究にはすでになされた演繹の反復として解されてきた VII₁の枚挙は、VII₃の補足ないし敷衍とみなされるかぎり、新たな演繹をなし、新たな学知をもたらす生産的な操作となりうる。「第七規則」の枚挙を統一的に解釈するという本稿の眼目は、以上で果たされた。

最後に、枚挙に関するわれわれの解釈が、いかなる哲学的問題に導かれるかを示しておこう。枚挙は、これまで非生産的とみなされてきた操作においてすら、順序——すなわち、演繹の諸前提を包摂する記号ないしはクラス、そして諸前提を考察する適切な順番——を含む。この順序は、われわれが枚挙を使用することによって、つまり諸前提を特定の仕方ですべて「配置する」ことによって¹⁹、事柄のうちに導入されるものである。この順序の適正さが枚挙の操作の正当性を支えており、枚挙の操作が長く複雑な演繹における諸前提の結合の必然性を支えている以上、『規則』における学知の必然性は、煎じ詰めればこの順序の成否にかかっている²⁰。

ところで、『規則』における順序がしばしば批判的となってきたのは、それが一方では、問題となっている事柄そのものに属する順序(cf. AT X, 391, 12; C. fo. 7^v)でありながら、他方では、われわれの枚挙の操作を通じて配置される、すなわちわれわれによって「創設」されるものだからである²¹。われわれがこの後者の側面のみに着目する場合には、順序はもっぱら恣意的なものとなり、デカルトの枚挙、ひいてはそれによって完成される学知は、事物そのものの必然性に達していないかのように思われる。こうして、われわれは、枚挙を解釈する作業を通じて、『規則』における必然性の問題へと接近する。むろん、順序に恣意性を認めるべきかいないかは、順序が一方では事柄の本性のうちに見出されるという側面をいかに理解するかを考察してはじめて回答されうる問題である²²。こうした課題は未だ開かれてはいるものの、枚挙をめぐる根本問題を剔抉したという一抹の成果をもって、本稿を閉じることにしよう。

注

- ¹ 一般的に、ここでの「帰納」の用法は、アリストテレス『分析論前書』に基づく(II, 23, b15–29)。また、帰納と枚挙の関連については、例えばミクラエリウスの『哲学字彙』の「帰納」の項目に、「それによってあらゆる部分が枚挙される」との記述がある(Micraelius 1653, 540)。
- ² 『ノーウム・オルガヌム』(II, 17; 69; 105)。なお、ベーコンの批判の焦点は、単純枚挙の手続きそのものにあるというよりも、むしろそれが即座に観察可能な事象を対象とすることにあるとされる(Urbach 1987, 30)。
- ³ 『序説』第二部では第四の準則として、ただしきわめて短縮された仕方、枚挙が論じられる(AT VI, 19, 3–5)。『情念論』では、情念の枚挙という仕方、実践される(AT XI, 373)。また、『幾何学』第一巻および第三巻に、枚挙も含めた『序説』における四つの準則に対応する解法が確認されている(Vuillemin 1960, 136; 武田 2023, 28–32)。
- ⁴ なお『規則』では、各規則の見出しが「規則(regula)」、「命題(propositio)」、「原則(praeceptum)」などと呼ばれ、各々に付された議論は「注釈(adnotatio)」、「解釈(interpretatio)」などと呼ばれる(cf. SE, 2)。本稿では、特に区別を要する場合に限り、前者を「本文」、後者を「注釈文」と呼称する。
- ⁵ なお、以下本稿で「第七規則」の段落に言及する場合、基本的にはAT版に準拠する。少なくとも「第七規則」については、AT版はA版の段落分けに忠実であり、またその他、MCやBKをはじめとする校訂版もこれを踏襲する。ただし、N版およびこれを定本とするGCにおいては、AT版第八段落の最終行(« Si denique..... », 390, 18–24)が独立して段落をなす(« Eindelijk, indien..... », GC, 24*)。ただし、第八段落内« Nam si / Want indien..... »(AT X, 390, 9; GC, 24*), « Si vero / Maar indien..... »(AT X, 390, 13; GC, 24*)に続く三つ目の例示であるこの箇所は明らかにこの段落の議論の継続にあたるため、解釈にはそれほど影響しない。
- ⁶ 『規則』の執筆時期を丹念に調査したヴェーバーは、「第七規則」注釈文を次の四つの部分に分節する。すなわち、(A)AT版第一・第二段落、(B)第三・第四段落、(C)第五・第六段落、(D)第七段落から末尾まで、の四つである。われわれは、C写本を踏まえて、(D)の中に分節を加え(第七段落と第八段落の間)、また内容的に最終段落を切り離すことで、ヴェーバーの区分を進展させた。ところでヴェーバーは、枚挙の用法という観点から、箇所(A, C)と(B, D)とをそれぞれ括り、後者が前者よりも先に執筆されたと推定する(Weber 1964, 51–52)。この推定は、枚挙の解釈において完全的に的外れとは言えないものの、執筆年代の推定としては、C写本が提供する知見に反するものである。
- ⁷ AT、MC、BKなど、既存の校訂版の多くは、A版を軸に、H写本とN版とを補助的に参照してきた。これに対して、N版を重視するものとしてはGCが、H写本に依拠するものとしてはSGZがある。現時点でC写本に基づく校訂版はSEのみである。
- ⁸ C写本の発見の経緯については下記を参照(SE, 15–16)。なお、C写本の概要に関する日本語の資料としては、発見から間もなく行われたサージャンソンによる報告についての記録がある(山田・池田 2012)。
- ⁹ C写本の執筆年代に関しては、SEは「第八規則」の屈折光線(anaclostique)の例に着目し、1619年ごろに書き始められたと推定する(SE, 99)。しかし、ド・ビュゾンが指摘する通り、この推定は、同時期の書簡等の記述を踏まえ、「第八規則」の執筆年代を1628年ごろとするコスタベルの推定(MC, 313–318)を塗り替えるだけの根拠はない(Agostini et al. 2023, 519–520)。
- ¹⁰ 結び目を「観る(videre)」(AT X, 389, 24; C. fo. 7^v)操作が、これを「直観する」操作と言い換え可能であるかどうかは定かではない。直観という語が「観る regarder」ことを意味する限り(MC, 298–302)、この言い換えによって致命的な誤解は生じないと思われる一方で、やはり諸前提の結合を観る操作は、加筆部で言うところの「運動」を含むものであるかぎり、純然たる直観とは異なるとも考えられるからである(AT X, 388, 4–7)。
- ¹¹ なお、アナグラムは、16世紀から17世紀にかけて、カバラや占星術の影響下で流行したとさ

- れ、メルセンヌのような科学者は、結合法の研究のためにアナグラムを扱った。クーメは、アナグラムの考察と枚举法の発展が関連性をもつと示唆している (Coumet 2016)。
- ¹² 『規則』における演繹と帰納 = 枚举との関係は、しばしば「第三規則」の一節をめぐって論じられてきた。「第三規則」では、「直観と帰納」とが学的探究の唯一の道とされており、この表現は、帰納 = 枚举と演繹とが、直観を除く唯一の探究手段として位置付けられる、つまりは、帰納 = 枚举と演繹とが実質的に同一視されることを意味する。ただし、A 版と H 写本に見られるこの表現は、N 版では「直観と演繹(*afleiding*)」とされており (GC, 8)、今日いくつかの校訂版は N 版に従う (BA, 87; BK, 338, *etc.*)。なお、C 写本には問題の一節は含まれない (SE, 159; 489; Agostini *et al.*, 522)。他方で、帰納 = 枚举と演繹とを同一視することを解釈上可能とする立場もあり (Hannequin 1908, 217; Rodis-Lewis, 2013, 171; MC, 117–119)、2 節で述べるように、本稿はこれに従う。
- ¹³ デカルトは「第十一規則」で同じことを説明しているが、そこでは演繹が「運動」もしくは「運動の終点」として捉えられるとされ、前者が(多様かつ錯綜している場合に)枚举によって、後者が直観によって認識されると整理されている。「第十一規則」のデカルトの説明はいささか煩雑であるため、本稿ではより簡略的に整理した。
- ¹⁴ 枚举のうちにふたつの使用を区別する解釈は多くの論者に共有されている。例えば、「保証の手続き *procédé de vérification*」と「探究の手続き *procédé de recherche*」(Sirven 1927, 384)、「垂直的」使用と「水平的」使用 (Laporte 1945, 6–7)、「振り返ること」と「調査」(Beck 1952, 134)、「保証に資する」使用と「探求に資する」使用 (Weber 1964, 52)、「結論を堅固にする手段」と「探究の道具」(Verbeek 2021, 58–59) 等々、それぞれ別々の呼称を用いているが、区別の内容に大差はない。なおユベールのように、大筋この区別に沿いながらも、それぞれを総合と分析に紐付けつつ論じるものもあるが (Hubert 1915, 514)、この解釈はほとんど『序説』に依拠する。他方で、こうした二分法的解釈にコミットしない研究も一部ある。枚举の操作をはじめから順序との関わりにおいて考察するマリオンは、本稿の立場に近く、二分法的解釈からは距離をとっている (Marion 2000, 103–111)。「さしあたり必然的な結びつきが知られていないいくつかの問題を導いて演繹的に取り扱うことを可能にする手段」(Cassirer 1922, 475) として枚举を特徴づけるカッシーラーの解釈もまた、二分法の枠にはまらない。これらふたつの研究は本稿の解釈にとって先達にあたるが、枚举を「順序の創設」と結びつけるためにはマリオンよりも細かい議論が必要であり、カッシーラーの解釈は枚举についてはあまりに概説的すぎる。そのほか、ヴェイユマンのようにもっぱら幾何学的探究における枚举の用法を主題化する研究においては、当然ながら「第七規則」をめぐり解釈上の問題は場をもたない (Vuillemin 1960, 135–138)。
- ¹⁵ これとほぼ同一の表現が「第十一規則」にある (AT X, 409, 3–5; C. fo. 14^v)。なおその箇所は、「第七規則」とは異なり、ごく微細な語句の相違を除き、C 写本にも確認できる。
- ¹⁶ 上述の注 14 において、枚举の二分法的理解を受け入れている先行研究は、いずれもこの解釈にコミットしている。なお付言しておく、この解釈の主要な典拠は、『規則』のほか、『序説』の第四準則がある。そもそも第四準則は、手前の三つの規則によって探究の主たる道具立てが揃っているように見えるだけに、反復によって見落としを回避するという非生産的な活動に枚举がもたらさずらうかのように読まれやすい。かくして、第四準則の枚举を、「第七規則」の記憶の問題と結びつけ、反復的操作として解釈する論者もある (Belaval 1960, 197)。しかし、1644 年に刊行されたクールセルによる『序説』ラテン語訳では、第四準則に「手段を探すことにおいて (*in quaerendis mediis*)」という一節が補われている (AT VI, 550; Descartes 2007, 117)。また、ポワソンはその『デカルト『方法序説』註解』において、第四準則をもっぱら「手段 (*moyen*)」の探究のための規則と解釈し (Poisson 1670, 83)、さらにその註解のほとんどを枚举による三段論法の「媒名辞 (*moyen*)」の探究に充てている (Poisson 1670, 84–91)。ポワソンのこの註解がデカルトの意図を適切に捉えているかはともかく (デカルトにおける媒名辞の問題については、佐藤 2018 に詳しい)、少なくとも同時代において、第四準則が記憶や反復に関わると

- いう理解は必ずしも標準的なものでなかったことを示唆している。また、フェルベークは、『序説』原文とラテン語訳との表現の上述の差異にデカルトの枚挙理解の年代的発展を読み込むが(Verbeek 2021, 58–60)、われわれはむしろ、原文においてデカルトが探究の手段という性格を明記する必要を考慮していなかったにすぎない、という可能性を排除しない。
- ¹⁷ ディカは、この点をもって、記憶の補助として用いられた枚挙には限界があると指摘する(Dika 2023, 106)。この指摘そのものにはわれわれも同意するが、果たして枚挙にそのような用法があると考えられるべきかどうかには疑問を呈する。
- ¹⁸ フェルベークもまた、枚挙の用法を二分する立場をとりながらも、単なる反復としての枚挙が記憶の補助や知能の陶冶に資するとは考えにくいと指摘し、記号を用いたある種の一般化を行う操作として枚挙を特徴づける(Verbeek, 2021, 50–51)。こうした解釈によってわれわれは、デカルト的枚挙が同一の思惟内容の反復にすぎないとして、むしろこれを記号化し一般化することにライブニッツの創見を見いだすベラヴァルの読解を退ける(Belaval 1960, 197)。
- ¹⁹ デカルトは「第五規則」で、「何らかの真理を発見するために精神の眼がそこに向けられるべきであるところのものを順序にしたがい配置することに(*in ordine et disponere*)、方法のすべてはある」(AT X, 379, 15; C. fo. 6)と述べる。《*in ordine et disponere*》について、一般的には「順序と配置において」と、ふたつの名詞を同格的にとるのが自然だが(GC, 16^{*}; BA, 100; BK, 357)、マリオンはこれを「順序のもとに配置すること(*à disposer en ordre*)」(MC, 16)としており、《*in ordine*》を《*disponere*》に副詞的にかけている。この読み方のテクスト的な根拠は『序説』や『規則』の用例に求められ、事柄的には、順序がわれわれの側での思索を通じて、具体的には枚挙の操作を通じて、創設されるべきものであるという解釈に基づいている(MC, 165–166; BK, 685)。
- ²⁰ 枚挙と必然性の問題との関わりについては、カッシーラーがこれを剔抉している。カッシーラーは、『規則論』の特に「第七規則」以前の解釈において、「幾何学と数学の一般的な規則に根ざす必然性」に満足するレオナルドやガリレイとは対比的に、必然性の由来にまで探究を進める点にデカルトの独自性を見る(Cassirer 1922, 441–442)。ただしカッシーラーによれば、デカルトの関心は数学的・自然学的な必然性から、その必然性が世界の実相を捉えているかどうかをめぐる「現実性」の問題へと移行し、それとともに形而上学的な基礎の問題が前景化する(Cassirer 1922, 482–483)。カッシーラーの解釈のこうした展開の是非については、本稿で問うことはできない。
- ²¹ 順序の「創設(*établissement*)」という語は、動詞(の現在分詞)の形で1629年11月20日メルセンヌ宛書簡に見られる(AT I, 80, 24–25)。マリオンは、順序の創設をもつばら恣意的な活動と解して、これを「虚構」とまで述べる(Marion 2000, 77)。また、より批判的に、枚挙の恣意性を指摘するものとして、ベラヴァルが典型である(Belaval 1960, 290)。
- ²² この問題は、『規則』解釈としては、言うまでもなく、マリオンが「灰色の存在論」として提起した、順序における「ウーシアの不在」または「事物の枚挙の不在」の問題系に属する(Marion 2000, 108; 110)。しかし同時に、枚挙がとりわけ「結合の必然性」を確保するための操作であることを強調するなら、これを「第五省察」における神の ア・プリオリ な実在証明に連なる問題系のうちに置くことも許されるだろう(村上 2005, 85–89)。

参考文献

- デカルトのテクストは、下記略号を用いて指示する。AT版からの引用の際は慣例にしたがい、巻数をローマ数字で、頁数・行数を順にアラビア数字で記す。なお、『規則』ケンブリッジ写本からの引用の際は、AT版に加え、フォリオのノンブルとその表(*recto*)・裏(*verso*)を記す。
- AT: Descartes, René. (1996). *Œuvres de Descartes* (C. Adam & P. Tannery, Eds.). Vrin.
- BA: ——. (2001). *Règles pour la direction de l'esprit* (J. Brunschvig, Transl., F. Alquié, Ed.). *Œuvres philosophiques* (Vol. 1). Garnier. (Original Work Published 1963)

- BK: —. (2016). *Œuvres complètes I: Premiers écrits* (J. -M. Beyssade & D. Kambouchner, Eds. & Transls.). Gallimard.
- GC: —. (1966). *Regulae ad directionem ingenii* (G. Crapulli, Ed.). Martinus Nijhoff.
- MC: —. (1977). *Règles utiles et claires pour la direction de l'esprit en la recherche de la vérité* (J. -L. Marion & P. Costabel, Eds. & Transls.). Martinus Nijhoff.
- SE: —. (2023). *Regulae ad directionem ingenii: An Early Manuscript Version* (R. Serjeantson & M. Edwards, Eds. & Transls.). Oxford University Press.
- SGZ: —. (1973). *Regulae ad directionem ingenii / Regeln zur Ausrichtung der Erkenntniskraft* (H. Springmeyer, L. Gäbe, & H. G. Zekl, Eds. & Transls.). Felix Meiner.
- Armogathe, J. -R. & Marion, J. -L. (1976). *Index des Regulae ad directionem ingenii de René Descartes*. Edizioni dell'Ateneo.
- Agostini, I., de Buzon, F., & Dika, T. (2023). Un événement cartésien: les *Règles pour la direction de l'esprit*, manuscrit de Cambridge. *Revue de métaphysique et de morale*, 120, 513–528.
- Beck, L. J. (1952). *The Method of Descartes*. Clarendon Press.
- Belaval, Y. (1960). *Leibniz critique de Descartes*. Gallimard.
- Cassirer, E. (1922). *Das Erkenntnisproblem* (Vol. 1). Yale University Press. (Original Work Published 1906)
- Coumet, E. (2016). Mersenne: dénombrements, répertoires, numérotations de permutations. In T. Martin & S. Roux (Eds.), *Œuvres d'Ernest Coumet* (pp. 231–276). Presses universitaires de Franche-Comté.
- Dika, T. R. (2023). *Descartes's Method*. Oxford University Press.
- Hubert, R. (1916). Théorie cartésienne de l'énumération. *Revue de métaphysique et de morale*. 23 (3). 489–516.
- Laporte, J. (1945). *Le rationalisme de Descartes*. Presses universitaires de France.
- Marion, J. -L. (2000). *Sur l'ontologie grise de Descartes*. Vrin. (Original work published 1975)
- Micraelius, J. (1653). *Lexicon philosophicum terminorum philosophis usitatorum*. Freyschmid.
- Poisson, N. -J. (1670). *Commentaire, ou remarques sur la méthode de René Descartes*. Sebastien Hip.
- Rodis-Lewis, G. (2013). *L'œuvre de Descartes*. Vrin. (Original Work Published 1971)
- Sirven, J. (1987). *Les années d'apprentissage de Descartes*. Garland. (Original Work Published 1928)
- Urbach, P. (1987). *Francis Bacon's Philosophy of Science*. Open Court.
- Verbeck, T. (2021). *Enumeratio in Descartes's Regulae ad directionem ingenii and Beyond*. In R. Garrod & A. Marr (Eds.), *Descartes and the Ingenium* (pp. 47–63). Brill.
- Vuillemin, J. (1960). *Mathématiques et métaphysique chez Descartes*. Presses universitaires de France.
- Weber, J. -P. (1964). *La constitution du texte des Regulae*. Société d'édition d'enseignement supérieur.
- 佐藤真人. (2018). 「デカルトはラムス主義者か——初期デカルト認識論に見る数学的方法の側面」『フランス哲学・思想研究』23, 174–186.
- 武田裕紀. (2023). 「デカルト『幾何学』と方法」『追手門学院大学 共通教育論集』1, 19–43.
- 村上勝三. (2005). 『デカルト研究Ⅱ 数学あるいは存在の重み』知泉書館.
- 山田弘明、池田真治. (2012). 「新発見のデカルト『規則論』写本」『フランス哲学・思想研究』17, 229–231.